



TITLE:

昭和18年からのこと(第I部:「物性論研究」及び「物性研究」編集者の回想記,<特集>「物性研究」10周年記念)

AUTHOR(S):

永宮, 健夫

CITATION:

永宮, 健夫. 昭和18年からのこと(第I部:「物性論研究」及び「物性研究」編集者の回想記,<特集>「物性研究」10周年記念). 物性研究 1973, 20(3): 72-74

ISSUE DATE:

1973-06-20

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/88650>

RIGHT:

第Ⅰ部：「物性論研究」及び「物性研究」

編集者の回想記

昭和18年からのこと

阪大基礎工学部 永 宮 健 夫

「物性研究」の前身である「物性論研究」が最初に出されたのは昭和18年である。1930年代の半ば（1935年は昭和10年）から、わが国でも統計力学、固体物理学の研究がさかんになりはじめ、戦争がはじまった昭和16年は、この機運の高まった1つの時期であった。物性論懇談会というものが、はっきりした組織を持たず、有志の者の集りとして発足したのは16年の終りか17年の始め頃で、山内恭彦（発足のときの支持者）、小谷正雄、有山兼孝、原島鮮、永宮健夫、高橋秀俊、押田勇雄、久保亮五など理論の者がこの中心であった。記録がないので正確なことは述べられない。以下も同様である。

この物性論懇談会を時々開こうという話がおこり、第1回は阪大理学部でということになって、私が世話をした。1日の研究発表会となって、記憶に残るものとしては、久保亮五さんの1次元規則配列系の統計力学、高橋秀俊さんの氷の理論（論文としてはついに発表せず）があった。発表会後に、懇談会ということで、食事の会をひらいた。

それから持回りで場所をかえ、何回か会合をひらいたが、そのたびごとに会は大きくなり、食事の会合も次第に世話が大変になり、戦争の激化とともに、ついに立消えとなった。分子構造論、摩擦の機構、などのテーマも取り上げられたと思う。

時は戦争の間でもあり、外国からの文献は入らなくなり、われわれの間で物性物理の発展を作ろうという気持であった。そういった気運の中で、研究を記録にとどめ、関係者の間にサーキュレートさせたいという考えが生れて行つた。私とその労をとることになったのは、いわば偶然の事情によっている。17年の終り頃だったかと思うが、名大から押田勇雄さんが大阪に出てこられ、私に冊子を発行せよ、と説かれた。たまたま前

田という本屋さんと知り合いになり、その手で印刷発行ということにして、「物性論研究」1, 2, 3, 4が出来たのである。

しかし以外に投稿は少くて、私から依頼して原稿を集め、校正、会計を一切私自身がやった。前田は、必要部数を私に渡し、他に自由に印刷して売るという希望であったか、どういうわけだったか、私は自由を与えず、必要部数に限った。もうけの方は、いずれ私が本を書くから、とっておいた。前田は、私の研究室の者に、損して出しているのですよ、けれど、自分はその先生が好きだからやっている、といったそうである。私に對しては、大阪商人は長い目でみてソロバンをはじく、といていた。この前田本屋が空襲で焼けて行方不明になり、「物性論研究」も終わった。私は今でも、もし前田さんがいたら会いたいと思う。

戦争の末期は、いまでは、よく生きて、しかも何かの仕事をつづけたものだと、われながら若さのエネルギーに感心するような時であった。しかし昭和20年、つづく敗戦後の21年は惨憺たる年で、何もいうべきことはない。(ただし、私はその間、マイクロ電磁波の研究をやり、ブラッグの結晶学概論の訳に手をつけ、液体ヘリウムという本を書き、かたわら病氣療養で群論の勉強をしていた。)

戦後の立直りがみえはじめ、文献も不自由ながらアメリカ文化センターでみられるようになった頃、第二の若い理論グループによって「物性論研究」がガリ版で再発行された。中嶋貞雄、碓井恒丸、富田和久の3氏がこれに当り、東大物理教室から出されるようになった。これは投稿でなり立ち、物性研究の促進に極めて大きい貢献をなしたと思う。私は、このガリ版を、吸いこまれるように熱心に読んだ。現在のように文献の洪水のような時代ではなく、文献を求めて餓えていた時代なのである。新しいアイディアや知識があれば、それをよく考え、身につけ、発展させようというのが、当時のふんい気だったのである。

やがてこの「物性論研究」も発行に手間をとるようになり、阪大の私の所で引受けることになって、小島忠宣君が実務をやってくれて、やや長い期間つづくこととなった。小島夫人の関係で紙の供給とガリ版印刷の便宜がえられたことも、滑らかに行った要因であった。この阪大版は、本論文前の予備発表の雑誌の性格をもったが、ケミカル・アブストラクトに引用されるようになって、正式の学術雑誌かどうかの問題がおき、また学会誌の復活もあって、「物性論研究」廃止の議論が出るようになった。その頃から京

特集：「物性研究」10周年記念

大に発行が移り、山本常信君らが中心となった。

現在の「物性研究」は、より歴史の浅い「素粒子論研究」の存続に刺激されたものであるといえよう。30年間の時の移りに従って、私個人の関心も変り、今日では「物性研究」からはいささか遠い所にいる。

以上、いささかぼけた記憶を辿って「物性論研究」、「物性研究」について述べた。

「物性論研究」（1949年～1957年）の思い出

東北大理，物理 小 島 忠 宣

「物性論研究」は、かつて東大物理教室で編集されていて、それが一応12号（1948年9月）をもって終刊とすることになったが、当時の出版事情より見て、この種の比較的手軽に、しかもスピーディーに発表できる雑誌はやはり必要だということで、13号（1949年2月）から阪大の永宮研で復刊させようという風に話がまとまったようである。

そこで、私が永宮教授から編集を命ぜられる破目になった次第であるが、当時はまだ戦災後の復興途中のこととて、まず適当なプリント屋を探すことが一苦勞であった。阪大に近い焼ビル内に開店したプリント屋に16号までやらせてみたものの、毎号印刷費の値上げを要求されるので、新たに新聞広告などを頼りに、最もよい条件で印刷を引受けてくれる店を、方々探す必要に迫られることになった。こうして結局17号（1949年8月）から、私が阪大から市大に移る直前の106号（1957年3月）に至る7年半程の間、平和プリント社にやって貰うことになった次第である。幸い同社の松本社長はこの種の学術出版に並々ならぬ情熱と理解とを示され、当時としては採算のとれる限度に近い低価格で引受けて下さった。永宮教授からは、「助手の仕事の一部としてやるように」ということで、時々会計報告をする他、編集から会計まで一切を私に一任された格好になり、はじめのうちは原紙の校正が最も手数のかかる仕事であった。しかしそれも一年位のことで、印刷所の方で、「物性論研究」のガリ切に、当時大阪でトップクラスの腕をもつ古橋氏を専任にし、更に、数学、物性の記号、用語にある程度理解のある、